

上野季夫先生を悼む

川口市郎 (京都大学名誉教授)

今年平成23年は大正100年にあたる。上野先生は明治の最後のお生まれであるので、年齢は100歳を少し超えられたのかもしれない。年長順に並んでいる京都大学名誉教授の名簿を見ると、先生は上から二番目である。その先生が先日肺炎のために亡くなられた。

上野先生が軍服に近い服装で宇宙物理学教室に帰還されたのは、戦争が終わって暫くしてからであった。戦争中、先生は陸軍の技術将校として、軍事技術の研究に従事されていたのである。最初、先生は三重県から京大の教室まで通ってこられ、当時の宮本助教授の下で研究を始められた。先生は輻射輸達論の権威者として有名であるが、その頃の先生の研究はもっと具体的な恒星大気論で、太陽光球の opacity source の解明にあったのではないかと私は記憶している。恒星大気構造には乱流の果たす役割りの大きいことから、そのうち先生は乱流の研究に重点を移されたようである。そして先生の乱流研究は、だんだんと難しい数学的な領域に及び、その手法が stochastic process として共通点をもつ輻射輸達論にまで発展したのであろう。先生は生涯400編以上の論文を発表されていた。私は上野教授の助教授としてのポストを占めていたので、先生の業績を報告しなければならない機会があった。誠にお恥ずかしいことではあるが、専門領域が全く異なり、しかも数学的手法に疎い私にはこれは苦行であった。さて、先生を学問的に述べるのはここまでとして、私の生涯の先生として、その優しいお人柄を語ることにしたい。

今の若い人々は講座制という言葉に馴染みがないであろう。学園紛争の生じる前には、宇宙物理学教室も講座制であった。大学の研究教育の最小の組織単位は講座であり、講座は通常、教授、助教授それと2名の助手から構成されていた。もち



写真1 上野季夫先生。



写真2 上野先生と約70年前の本当の“戦友”たち。先生は左から2人目。遠足時のスナップ。

ろん、講座の管理運営の責任は教授にあった。しかし、講座制の弊害もたびたび指摘されていた。例を挙げると、2講座しかなかった宇宙物理学教室はそれぞれの講座にそれぞれの図書室をもち、

しかも研究者と学生は異なった講座の図書室を利用し難い雰囲気にあった。この不合理な講座制をなくすべく、上野先生は第二講座の清水先生と話し合われた。その結果、どのような約束がなされたのか、私は憶えていないけれども、話はまとまり、共通の図書室は実現した。これを契機として、教室の研究教育の形態はだんだんと変化し、これは良い方向の転換であったと私は思っている。

この頃の教室は本当に貧乏教室であった。自分たちの研究費はもちろんのこと、大学院生の研究費を確保することは教授の大仕事であった。そしてこの頃になると研究費の中にcomputerの使用料が増大した。当時の教室の乏しい財政では、大学院生のcomputerの使用を制限せざるをえない状況であった。この研究費の問題を解決すべく、先生の取られた方法は日米科学の共同研究に応募することであった。この時米国側にJet Propulsion Laboratoryの名前があったのかどうか、“米帝国主義”と関係があるとかないとか批判され、理学部の問題となり、何人かの先生方が共同研究を中止するよう団交にきた。私も同席したが全くやりきれない事件であった。結局、先生はこの共同研究を断念された。この結果、先生は定年を待つことなく、京都大学を辞職された。先生は研究仲間招かれて、南カルフォルニア大学に赴任され、ロスアンゼルスで生活されるようになった。

当時研究費不足と並んで深刻な問題はOD問題であった。宇宙物理教室も理学部の他教室と同じく、あるいはそれ以上に、ODがあふれていた。実際優秀な若い人材が職もなく、アルバイトをしながら研究を続けているのを見ると、“もったい

ない”と思う。しかし現実には厳しく、上野先生も悩んでおられた。その先生は数年の滞米後帰国され、金沢工業大学に落ち着かれた。そしてお宅は京都に残されたまま単身赴任の形を取られた。先生の再就職には教室卒業生の尽力があった。この後、上野先生はこの大学に数名の教室ODを採用され、当時先生の後任であった私はたいへんありがたかった。

最後に私はどうしても書いておきたいことがある。これは天文学とも、宇宙物理学教室とも全く関係ないことであるが、先生のお人柄を知る最も良いエピソードであると思うから。すでに述べたように、戦時中先生は技術将校であり、その任務は赤外線センサーの開発で、百発百中の爆弾の研究であった。このため浜名湖で筏の上でたき火をして、これを爆撃するという実験をされていた。当時の技術水準からみて、これが成功したとは到底思えない。敗戦後何時のことかわからないが、先生はこの戦時中の仲間とかなりの頻度でコンパを始められた。そしてどういうわけか兵役に関係のない私も、途中からこのコンパの一員となった。この仲間たちの半分位は大学の先生であった。このコンパは実に和やかで、私もほとんど欠席することなく、時には桜の満開の吉野山で開催された。このコンパの上野先生は、宇宙物理学教室の上野教授ではなく、別人のように生き生きとされていた。約10年も前、先生が息子さんの所に引っ越しされる時、山科の料理屋で、私が準備をして先生ご夫妻と他の仲間たちで行ったコンパが最後となった。そしてこの仲間たちもほとんどあの世に行かれた。今頃この仲間たちは天国で集まり、“ようこそ隊長”と歓迎のコンパが行われているに違いないと思っている。